

2019 年度学生委員会報告書

公益財団法人 日本財団学生ボランティアセンター

2019 年度学生委員会

I. 学生委員会の目的

学生委員会（以下、「委員会」という。）は、公益財団法人日本財団学生ボランティアセンター（以下、「センター」という。）定款第45条の規定による専門委員会として、学生の様々な意見を取り入れるために設置している（規14号 第1条）。センター事業に関する助言又は提案を任務としている（同 第2条）。

II. 学生委員

本年度の学生委員（以下、「委員」という。）は、2019年6月12日に行われた第15回理事会において選任された。委員は6名で、センター実習生、大学ボランティアセンター学生スタッフ、地方大学在籍者、留学生、センター事業参加者、ボランティアに精通している者などから構成された。委員の選任理由は以下の通りである。

・岩淵 汐音

（千葉大学文学部2年／ボランティアに精通している者）

東京2020で「若者のオリンピック・パラリンピックへの参画」を実現するというミッションを持つ学生団体おりがみの福祉チーム副リーダーとして活動しており、ボランティアや社会参画について積極的な意見を期待できるため。

・上野 聡子（東京家政大学人文学部3年／センター実習生）＊委員長

国際ボランティア学生協会（IVUSA）に所属し、東日本大震災復興支援活動や地域活性化、国際協力などの分野で活動しており、今年度よりセンターインターンとなった。本人に学生委員を希望する強い意思があり、委員長としての活躍も期待できるため。

・河原 颯

（東北学院大学教養学部3年／大学ボランティアセンタースタッフ／地方大学在籍者）

東北学院大学ボランティアステーション学生スタッフとして仮設支援などの活動をしており、ゼミでも防災・減災の伝承活動を扱い、河北新報「記者と駆けるインターン」にも参加している。東北の学生として、またボランティアへの意見が期待できるため。

・進藤 亜美

（関西学院大学大学院理工学研究科修士2年／センター事業参加者／地方大学在籍者）

学部生の時はEco-Habitat 関西学院として海外での住居建設の活動などを行い、センターと大学コンソーシアムひょうご神戸の2017年度連携事業でもリーダーシップを発揮した。平成30年7月豪雨へのボランティア派遣にも参加しており、関西の学生やセンター事業参加者としての意見も期待できるため。

・鈴木 康広（神奈川工科大学応用バイオ科学部 4 年／ボランティアに精通している者）
毎年こどもから大人まで 1,000 名近くが参加する「わこう・あそびの森」企画リーダーとして活動する一方、全国学生ボランティアフォーラム実行委員会を立ち上げて、実行委員としてネットワークの場をつくっており、学生の活動について積極的な意見を期待できるため。

・ワン ノー ファズィラ ビンティ ワン ナジュムッディン
（長崎大学経済学部 2 年／留学生／センター事業参加者／地方大学在籍者）
マレーシア出身であり、長崎大学社会活動支援プログラム「やってみゅーでスク」のボランティア活動に参画しており、センターのボランティア・シンポジウムにも参加した。留学生かつ九州の学生としての意見が期待できるため。

III. 開催概要

開催の日時・場所を委員会で検討の結果、センターにて委員会を 5 回開催した。

第 1 回委員会

日 時：2019 年 6 月 15 日(土)16:30~19:00

場 所：センター 6 階会議室

参加者：委員 6 名、職員 2 名

議事要旨：・委員へのセンター設立趣旨・事業概要説明と質疑応答

・各委員よりの自己紹介(ボランティア活動を行う動機を含む)

・センター事業の良い点や改善点、センター事業に限らない学生ボランティア全般において委員会で議論すべき点

第 2 回委員会

日 時：2019 年 8 月 16 日(金)15:30~18:20

場 所：センター 6 階会議室

参加者：委員 5 名（岩淵、上野、河原、進藤、ワン ナジュムッディン）、職員 2 名

議事要旨：・これから重要となる社会問題を踏まえたセンターへの提案についての意見交換

・理事会への提案に向けたスケジュールの確認

・次回開催場所と内容について意見交換

第 3 回委員会

日 時：2019 年 11 月 3 日(日)10:00-15:00

場 所：センター ミーティングスペース(*)

参加者：委員 6 名、職員 1 名

議事要旨：・委員が参加したセンターの災害ボランティア派遣についての意見交換

・センターへの提案内容についての意見交換

*第2回委員会では、第3回委員会を神戸市とする予定だったが、台風15号及び19号の被害とセンターのボランティア派遣実施を受けて、変更した。委員が11月2日(土)に実施された令和元年台風15号/19号ボランティア関東第6陣に参加して、翌日にセンターで実施することとした。

第4回委員会

日時：2020年2月8日(土)13:00-16:00

場所：センター6階会議室

参加者：委員4名（岩淵、上野、河原、進藤(Skype))、職員1名

議事要旨：センターへの提案内容についての意見交換

第5回委員会

日時：2020年2月18日(火)13:00-16:00

場所：センター6階会議室

参加者：委員4名（岩淵、上野、進藤、鈴木）、職員1名

議事要旨：センターへの提案内容の決定

IV. センター事業への提案及び意見

本年度は各委員が持つ多様な経験をもとに、委員が参加したセンター事業を中心として検証を行い、評価出来る点や改善点を議論した。学生に対してセンターの知名度がどうすれば向上するか、これから重要となる社会問題とは何なのかまで話が及び、それを踏まえた上でセンターが為すべきことは何なのか意見交換を行った。提案と言えるものもあれば、意見に留まるものもあった。以下の提案及び意見には、次年度からの反映が難しいこともあるだろうが、検討を願う。

1. 協定校及びセンター理事在籍校における事業の周知

(1) 経緯

委員会において、学生委員は選任前からセンターの存在を知っているが、大多数の学生がセンターを知らず、またボランティアを知る機会が少なく、能動的な学生のみが活動しているという現状が確認された。

(2) 課題

学生にとって、センターが圧倒的に知られていない。また、センターの持つリソースが活用しきれていない。大学のボランティアサークルは玉石混交で不安があるため、活動に踏み出せない学生もいる。

(3) 提案及び意見

授業、新入生ガイダンスなどにおいては、多くの在学生の参加が見込まれる。その際に

協定校及びセンター理事在籍校にて、理事を含む教職員が直接に学生に、センター主催事業や大学との連携事業などを周知する。周知のために必要なツールは、センターが準備・提供を行う。日本財団の名を冠し、活動実績を持つセンターは学生にとって安心感と信頼感を生みやすいと考えられるため、まずは知ってもらう機会が重要である。

2. チーム「ながぐつ」プロジェクトのプログラム内容の改善

(1) 経緯

学生委員5名が、11月2日に実施された令和元年台風15号/19号ボランティア関東第6陣へ参加した。栃木県鹿沼市において、学生委員を含む16名が、センターが委託した引率のもと、農地の復旧として流木や瓦礫の撤去を行った。

(2) 課題

- ① 個々人が次の活動へ繋げるためにも振り返りがとても重要であるが、感じたことを参加者間で共有する時間が極めて少なかった。バス内での振り返りであったため、個々人による一方向な発信のみに限られていた。
- ② 日帰りであるため、活動地域との関わりや他の参加者と関わる機会が少なかった。
- ③ 参加者への事前連絡で「寄付金は任意」とされているが、現場レベルでは支払うことが必須であるように感じられ、学生の不信感にも繋がりがかねない。

(3) 提案及び意見

- ① 参加者が帰路のバス車内にて、スマートフォンからグーグルフォームなどに振り返りを入力して、入力結果をその場で共有する。次の陣でも、振り返りを見られるようにして、経験を繋げる。
- ② 出発地と活動地が近距離であっても、宿泊を伴うプログラムを増やし、現地での作業のみならず、十分な振り返りを持ち、現地の方と関わる機会をつくる。
- ③ 図や表などで学生が認識しやすいように、寄付金の意義について説明する。旅行業法抵触の恐れがあるため、寄付金が派遣のための費用と勘違いされる表現は難しく事実も異なる。しかし、寄付金がセンターの理念において重要であると認識してもらうことが必要である。

3. 災害ボランティアセンターへの学生派遣

(1) 経緯

本年度は台風19号をはじめとして多くの大規模災害が生じ、センターも学生派遣を行った。派遣日程は、日帰りもしくは2泊3日程度であり、短期間に大人数が活動を行い、被災地復旧の一助となった。

(2) 課題

IV-1(2)②でも述べたように、短期間の活動においては、学生の学びは限定的である。また、受入先の災害ボランティアセンターは慢性的な人不足を抱えており、経験の有無を問わず、一定期間に当該センターの運営に携わる人財を求めている。

(3) 提案及び意見

発災後すみやかに災害ボランティアセンターや当該センターの運営支援団体へ、1週間から1ヵ月などの期間で学生を派遣する。学生は、災害支援現場に身を置くことで、短期間のボランティアでは体験し得ない、復旧・復興過程での諸課題や活動ノウハウを学び、今後の発災時にも活躍できる。学生のマッチングや事前研修は必須となる。

4. 学生の専攻・志向に即した地域での活動の推進

(1) 経緯

委員会において、これから重要となる社会問題を踏まえたセンターへの提案についての意見交換を行い、国内の社会構造や人口構成の変化による「コミュニティの希薄化」に対して学生ボランティアが取り組むべき課題であるとの共通認識が生まれた。その課題に取り組むことで、今後も頻発が懸念される災害への備えにもなる。

(2) 課題

コミュニティでのボランティアをする学生は少なくないが、センターの「全国学生1万人 ボランティアに関する意識調査2017」にも示されているように、学生のボランティアに対するイメージは「慈善活動」「災害支援」などが根強く、参加のハードルも高い。

(3) 提案及び意見

災害支援だけではなく、学生と地域を繋げるプログラムを展開させる。先行する好事例の一部として進藤委員の在学する関西学院大学の取り組みを以下に示す。

- i. 都市開発、観光、地域創生などを専攻する学生が、鹿の獣害に対して困っている地域にて、フレンチレストランや保健所にヒアリングを行い、鹿肉のニーズの重要性を猟師や市役所などのステイクホルダーにプレゼンテーションを行った。結果として、住民の認識にも変化があり、鹿肉が流通するようになった。
- ii. 教育を専攻する学生が、サークルで行う海外での住宅建設ボランティアを、地域の高校などでプレゼンテーションするという実践の経験を積んだ。聴衆であった高校生には、これを契機として関西学院大学へ入学した者もいた。

5. Gakuvo Style Fund

(1) 経緯

学生委員2名が、12月7日から8日にかけて1泊2日で実施されたボランティア・シンポジウムに参加した。同イベントでは、学生委員を含む30名弱が、各々のボランティア体験を発表したり、悩みを話し合ったりというプログラムに参加した。同イベントはGakuvo Style Fund2019採択団体が成果を発表する活動シェア会も含まれていた。

(2) 課題

採択団体の発表には活動報告のみであり、決算が無かった。個別に団体にヒアリングしたところ、協力金の適用範囲の認識に差異があった。

(3) 提案

資金調達や決算などの財務について発表するなどして、自団体の経験を他の学生に還元する機会をつくる。センターの支援によって、活動の発展にどのように寄与したかの振

り返りも共有する。また、協力金交付前に、センターと採択団体間で、予算執行上のルールなどの確認を密に行う。

V. まとめ

委員は、5回の委員会を中心に意見交換を行い、委員会として本報告書をまとめた。学生目線でセンター事業や今後の展開について提案をつくっていく際には、委員のみでは、一方的になりがちであるため、職員の参加が不可欠であった。しかし理事会の諮問機関としての委員会であるからには、理事への中間報告を行い、フィードバックもいただき、提案をより良いものにしたいと考えている。来年度にご検討を願う。今後も委員会での議論が活発に展開されていくことに期待して、本報告書のまとめとする。